

# プーチン時代20年のロシアの今

日本放送協会解説委員

石川一洋  
いしかわ いちよう



プーチン大統領がロシア大統領に就任した2000年、ロシアはアイデンティティーを喪失した状況にあった。「ロシアが何であるのかわからなくなってしまった」多くの国民が、ロシアも崩壊してしまうのではないかという不安を感じていた。それから20年、プーチン大統領はその不安を払拭し、ユーラシアの大国としてのロシアのアイデンティティーを再構築した。しかし若き大統領が掲げた「リスボンからウラジオストクまで」という大ヨーロッパ構想は破綻し、今はヨーロッパとの深い分断のなかで孤高の大国の道歩んでいる。安定と経済発展への希望は、今再び不確かな未来への不安に変わろうとしている。

## 中露「同盟」の行方

米国が自由な国々と非自由な国々(中露)の対決と戦略状況を位置付けるなかで、ロシアにとって中国との関係はますます重要となっ

ている。プーチン大統領は中国との関係を同盟的な関係と初めて呼び、中国にミサイルの早期警戒システムを供給する考えを示した。中距離ミサイル全廃条約が無効となるなかで、米国との戦略的バランスの面で中露がどこまで協力を深めるのか。2020年に今後の中露関係を規定する新たな文書が調印される可能性もある。しかしロシアの権力内部には中国との関係ではさまざまな意見があり、安全保障上の同盟関係までは踏み込まないと私はみている。ロシアとしては中国以外の関係の可能性を残しておきたいからだ。

## 新たなフロンティア・北極海航路

ユーラシア国家としてのロシアの新たなフロンティアとなっているのは、北極圏の資源開発と北極海航路の実現だ。日本も参加するヤマル半島のLNG(液化天然ガス)開発が、北極海航路実現への震源地だ。そこから北極

海航路を支えるインフラが整備され始めている。その1つが日本の対岸沿海地方にあるボリシヨイ・カーメニ。もともと原子力潜水艦などの修理を行う軍事用造船所があり、外国人の立ち入りは禁止されていた。その町が今ロシアの北極圏開発の拠点都市として大きく変貌している。湾を取り囲むように造船所とドックの建設が進められ、原子力砕氷船用の巨大な乾式ドックの建設の最中だった。

建造されるのは北極海の資源開発に必要なさまざまな船舶専用だ。主な船は2つ。1つは三井物産・JOGMEC(石油天然ガス・金属鉱物資源機構)が資本参加したアークティック2プロジェクトのための北極海用のLNG輸送タンカー、もう1つは巨大な原子力砕氷船だ。こうした北極圏開発向けの新たなインフラがムルマンスクやカムチャツカにも計画されている。ヨーロッパからアジアにまたがる巨大な大陸国家ロシアだが、海への出口



ZVEZDA造船所(ポリショイ・カーメニ)の完成予定図

は限られ、東西航路へのアクセスは制限されてきた。北極海航路の実現は、ロシアが海でもユーラシアのつなぎ目となることを意味する。

## 孤高の大国の外交・シリアとウクライナ

ロシアは真の友人のいない孤獨な大国である。しかしそのことはロシアが孤立していることを意味しない。欧米との厳しい対立の原因となったシリアでは、アサド政権をめぐっては厳しく対立するトルコと手を結び、クルド人武装勢力の国境地帯からの排除とロシア・トルコの共同パトリールで合意した。シリアの和平プロセスは、ロシア、トルコ、イラン

というこの地域の覇権を争った3カ国が保護者となった。帝国時代に戻ったかのような姿である。ただ「血塗られた砂漠」とシリアを捨てたトランプ米大統領の判断と、関与を強めたプーチン大統領の判断は、将来的にどちらが正解かはわからない。治安にも関与するとは泥沼から抜け出せなくなるおそれもある。プーチン大統領にとってオスマン帝国の復活を夢見るエルドアン・トルコ大統領との連携が同床異夢ではあるが、死活的に重要となる。ヨーロッパとロシアの分断はもはや固定化し、分断を前提に利益の共有への冷徹な関係構築が続いている。ロシアはヨーロッパに北のノルドストリーム2、南のトルコストリームとガスパイプラインを伸ばし、ウクライナを迂回するかたちでガス供給を増やす。米国とウクライナの強い反対にもかかわらず、ドイツやフランスなど古いヨーロッパは自国のエネルギー安全保障という実利を優先する。そのウクライナでは、フランスの積極的な仲介でロシア、ウクライナ、ドイツ、フランスの4カ国首脳会談が2019年12月9日に行われた。東部ウクライナでの全面的停戦と捕虜の交換で合意したのは具体的成果だ。しかしプーチン大統領とウクライナのゼレンスキー大統領、親ロシア派の支配地域に自治権を与えるなど道筋での隔たりは大きい。平和への道はまだ遠い。

### 変化への欲求と停滞

知的なひらめきのある警句、物まねで人気

のあるテレビ芸人マクシム・ガルキン氏がシベリアの舞台で「テレビの政治番組でウクライナのことばかり話しているがもう飽き飽きだ。われわれのことを話してくれ。プーチン以外の大統領を知らない世代が育っている。プーチンは個人名でなく一種の職位となった」などロシアの閉塞状況をあからさまに述べて、YouTubeの動画が大きな反響を呼んだ。世論調査では反米や反ヨーロッパの感情は低下している。大国としての誇りも大事だが、それだけでは生きていられない。国民の隠れた欲求をつかみ取ることに長けた天才的なナビュリストであるプーチン大統領がそれをわからないはずはない。低下傾向にあるとはいえ、良きツァーリ(皇帝)としてのプーチン大統領への支持はまだ底堅い。しかしプーチン大統領は変化を先送りしている。

深刻なのは、ほかに国民と対話できる政治家が権力内部に見あたらないことだ。体制のプーチン依存が強まっている。安全保障と経済の経験があり、国民の人気を集める新たなツァーリが見つかるのか。2008年にはメドベージェフ氏とイワノフ氏というカードがあった。しかしそのカードはもう使えない。『若き親衛隊』もまだ見当たらない。最良の中央銀行総裁といわれるナビウリナのような経験ある女帝が良いのではとの声もあるが、2024年にかけてポストプーチンがプーチン氏となった時、それは体制の強さではなく停滞の深刻さを示すことになるだろう。